



平成二十四年 正月

三箇日で73万人が初詣

近年最多の参拝者数となる

平成二十四年「壬辰」^{みずのたつ}、神武天皇即位紀元二千六百七十二年の新年を迎えた。

新年の時を告げる本殿の大大鼓が境内に響き渡り、同時に神門が開かれると、初詣の人の波は瞬く間に拝殿前に広がり、拍手を打ち、両手を合わせ、新しい年に祈る人々の熱気で境内は満ち溢れた。

大晦日は、午後十一時頃より雨模様となるが開門前の時点で初詣の人々の列は表参道を越え、その列は社務所前まで繋がった。

元日、午前九時より高向宮司以下神職奉仕のもと本殿にて元旦祭、又雨の為、高宮新年祭も併せて斎行され皇室



年明けを待つ列



宗 像

2月祭事暦

1・15日 月次祭

午前10時～

高宮祭

第二宮・第三宮祭

宗像護国神社祭(1日)

午前11時～

総社祭

浦安舞奉奏(1日)

豊栄舞奉奏(15日)

3日 節分祭

午前11時～

於=本殿

豆打ち式

午前11時30分～

於=本殿横特設ステージ

11日 建国祭

午前11時～

余滴

我々日本人には、生を受け命を終えるまでに、節目節目において様々な人生儀礼がある▼その儀礼の中でお祝いではなく、懐む時期が誰しもが迎える厄年である。この厄年には大きく分けて二つの流れがある▼一つは古代中国から伝来して日本独自の発展を遂げた陰陽道に起因する「厄年」。もう一つは一定の年齢に達したものが神社仏閣にて奉仕する「役年」を担い、神事に参加するために心身の清浄を保ちお勤めする「役年」である。後者は全国地方地方にて呼び名が違い、山口地方では現在神様にお仕える年として「神役」と呼ばれ氏子が奉仕を行っている。もともとは一定の年齢に達した厄年者がつとめる役であったが、昨今の少子高齢化・核家族・過疎化等の社会状況の変貌に伴い、集落の中から厄年に関係なく選出されるようになった▼そのような厄年であるが、現在は一般的な概念として「恐れ」「災い」「事故」等マイナスイメージに捉われがちである。確かにそのような部分も考えられなくないが、それだけでなく先人から伝わるこの年廻りには、長い人生の中で一度立ち止まり、これまでの反省点とこれから迎える未来への飛躍の為の準備期間とも考えられて来たのである▼ただこの年廻りを悲観的な日と捉えるのではなく、常日頃の無事を素直に神様・御先祖様に感謝し前向きに過ごす年廻りがこの厄年の本義であらう。

(中)



遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

神具・装束・授与品



装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
フリーダイヤル 0120-075-980

福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401
フリーダイヤル 0120-055-092

授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406 福岡県宗像市稲元4丁目20 電話(0940)32-2567

の弥栄、国家の安泰、氏子崇敬者のご多幸が祈念された。

新年祭は二日、三日も斎行され、三日には宗像護国神社で新年祭が斎行された。

沖津宮、中津宮でも同じく新年祭が斎行されており、中津宮では三日、元始祭に併せて宗像漁協大島支所の大漁祈願



元旦

大いに賑わった。その賑わう境内に流れる「春の海」の調べも、穏やかな天候に合い新年の清々しさを感じさせた。

連休の七日、九日は気温も十一度位となり、時々晴れ間も広がった。この天候が多くの人出に繋がったように思われる。しかし、周辺の道路では大

祭が恒例により斎行された。

新年三箇日は、



渋滞が続き当大社に着くまでかなりの時間がかかった模様である。

大鼓が新年の時を鳴らしたのと同時に本殿では、今年の一

番祈願として例年通り唐池恒二社長参列の下、九州旅客鉄道(株)の祈願祭が斎行された。

引続き、宗像青年会議所の祈願祭が斎行された。

本殿での祈願祭は仕事始めとなった四日以降から企業・団体の参拜で大変混雑し、儀式殿においても新年の家内安全、厄年等の祈願祭で三箇日、そして週末の連休にも多くの方々がご祈願に訪れた。祈願殿では、新年の交通安全のお

祓いを受けられる車両、特に四日の月曜日以降は、企業の社用車両のお祓いで第一駐車場は多くの車両で混雑した。

宗像大神の御降臨の地とされる高宮祭場は、近年のパワースポットブームの影響も有り多くの方がお参りされ、沖津宮の御分霊を祀る第二宮、中津宮の御分霊を祀る第三宮も併せて多くの人々が参拝し賑わいをみせていた。

成人の日、宗像市では八日に式典が行われ、当日境内は振り袖姿の成人者で華やいだ雰囲気包まれた。前日の七日には、ヤマザキ製パン(株)福岡工場三十六名の成人祭が





当社祈願殿にて行われ、玉串を捧げ成人を奉告し、これからの活躍・健康を祈念していた。当大社では、例年十五日に宮司以下神職奉仕のもと本殿にて成人祭を斎行している。

くじの各社頭に巫女・巫女見習約八十名が配置につき応対。お神酒授与所では地元総代・協力会の奉仕により甘酒が振る舞われ好評であった。御手洗については、これまで老朽化、便器数等で参拝者の方々に大変ご迷惑をお掛けしていたが、一昨年の十二月に最新の設備を備えた御手洗が完成しており、また本年は案内板も充実させ、寒い中での長い行列も無くご利用頂けた。

正月三箇日の人出は、天候にも恵まれ、予想の六十五万人より八万人多い七十三万人の初詣参拝者数を数えた。

正月警備には、本年も雑踏警備に宗像市消防団、ふくろう部隊、宗像警察署の皆様には境内全体の警備をして頂き、大きな問題もなく滞り事無く正月を終える事が出来た。

十二月三十一日午後三時より、神門前で年越しの大祓神事、続いて本殿で除夜祭が斎行された。

吹きかけて切り裂き、「大麻」にて天・地・人形の罪・穢れを祓い清めた。

ある。神事を終えると参列された小さな子供から年配の方まで、清々しい表情が溢れていた。

大祓式は七月三十一日と十二月三十一日の年二回行われており、それぞれの半年間で身についた罪穢を祓い除き清浄な心身に戻すことに意味がある。その起源は、黄泉国から帰った伊邪那岐命が、その穢れを筑紫日向の橘・小門之阿波岐原で祓い除き清浄にされたことに発するといわれ、神話の時代にまで遡ることが出来る。



引き続き、本殿で除夜祭を斎行し今年一年戴いた宗像大神様の御加護に感謝し、皇室・国家の繁栄、世界の恒久平和、氏子崇敬者の皆様方のご健勝を祈念し、平成二十三年の諸祭儀は全て滞り無く終了した。

年越しの大祓神事・除夜祭

筑前大島 中津宮の正月

大晦日、午後より沖・中両宮奉賛会・同翼賛会員の奉仕により社殿・境内の装飾、福みくじ授与所設営等、新年を迎える準備が進められた。午後五時、神門前で年越大祓式、引き続き本殿にて平成二十三年の祭典を納める除夜祭が斎行された。

年明け午前零時、神苑に太鼓の音が響き渡ると、それを合図に開門、参拝者は神前に進み、新玉の祈りを捧げた。

社頭では、正月の縁起物の

破魔矢、熊手、干支辰の一刀彫等が授与されると共に、恒例の「中津宮新春福みくじ」が翼賛会の奉仕により行われ、宗像農業協同組合大島支店より特別協賛を賜り、授与所には新年の福を授かろうと多くの参拝者が詰め寄せた。

又、境内では大島巻網船団の宮地丸組・春日丸水産・沖栄水産から寒鯛を、日並嘉孝氏、松田澄江氏からは野菜の

ご芳志を頂き「開運大鯛鍋」が本年も振舞われ、大島ならではの冬の味覚が参拝者を迎えた。

午前七時、神前に島内外から献上された御初穂や海の幸・野の幸等がお供えされ、元旦祭が斎行された。奉賛会・翼賛会会員を始め島民が参列する中、国家安泰と皇室の弥栄、国民の幸福が祈念された。

二日、大島では毎年帰省者の多い正月二日に、成人祭・同年講厄除祈願祭を行うのが慣例となっている。午前十一時、新成人七名と保護者・恩師等参列のもと、厳かに成人祭が斎行された。島民は初宮、七五三、小中学校入学・卒業時等、人生の節目においては、必ず中津宮に参詣し奉告祭を行っており、凛々しく成長した新成人の姿を目にし、感慨一入である。

それを前後して、三十三才、四十一才、四十四才の各々に厄除・晴厄の同年講祈願祭も斎行され、境内ではあちらこちらで、久しぶりの同級生との再会に話が弾んでいた。



三日、午前十一時より元始祭併せて宗像漁協大島支所の 大漁祈願祭が斎行された。奉賛会・翼賛会員並びに漁協役員、漁業従事者が参列し、国の悠遠の古、元始を偲び、併せて本年初頭の漁業繁栄、航海安全が祈念された。

又、八日には今年還暦迎える

四十二名の還暦奉賽祈願祭が盛大に斎行され、祭典後には一ノ鳥居前にて餅撒きやリヤカーにてパレードが行われ、大いに賑わいをみせた。



今年の中津宮正月祭諸祭典斎行にあたり、多大なるご協力・ご協賛を頂きました氏子・崇敬者各位には衷心より御礼申し上げます。



成人を迎えた七名

還暦を迎えた方々

献米奉告祭齋行

寒さの厳しい一

月十三日、氏子会総代・評議員多数のご参列の下、献米奉告祭が齋行され、氏子の皆様から寄せられた新穀を御神前に献上し、昨年秋季の収穫を感謝すると共に、今年五穀豊穡、無病息災を祈った。

祭典では、氏子を代表し尾野国治氏が奉幣使として御奉仕された。前日から当大社に齋泊、精進齋の上、齋服を着装して祭典に臨まれ、無事に氏子奉幣詞を宗像大神の大前で奏上、大役を見事に果された。

祭典終了後には氏子会役員を長年お勤めいただいた方(十年以上)の表彰式が行われ、本年は氏子会評議員である、永島繁美氏と小森信策氏に感謝状と記念品が宮司より贈呈され、参列した氏子会関係者から温かい祝福を受けた。

その後、清明殿を会場に「鏡開き」が行われ、直会として皆で雑煮・ぜんざいを頂き、新しい一年清々しく過ごす事ができると当大社を後



にした。

尚、ご奉納いただいた献米は、日々の日供祭をはじめ、諸祭典の神饌としてお供えし、皆様方の安全と繁栄を御祈念致しております事を御報告致し、心より御礼申し上げます。

献米奉告祭氏子奉幣使

尾野 国治氏(福津市勝浦)



宗像大社氏子会

永年勤続者表彰

氏子会評議員

永島 繁美氏(福津市勝浦)

氏子会評議員

小森 信策氏(福津市若木台)



古写真探訪

沖ノ島

NO.5

写真は波止場付近、「御前(おまえ)の浜」と呼ばれ、この場所で常駐する神職が禊(みそぎ)を行います。

ご周知の通り、上陸時には必ず海中での禊を行い心身共に清浄にする事が古来からの掟として守られ、清浄である事に特に注意を払わなければなりません。

せん。その為、昔から島へ渡る前日に先ずは中津宮が鎮座する大島に渡り潔齋を行う事が正式な渡島の仕方とされてきました。現在でも、例えば五月二十七日に沖ノ島で齋行される「現地大祭」では、神職も含め一般の参列者の方々も大島で潔齋を行い翌日の渡島に備えます。

写真中央に大きな岩があります。「太鼓岩」と云い、大波が当たると名前の通り「ドーン」と太鼓の様に音が鳴り響いたと聞きます。現在は、写真の通り大規模な波止場が築かれており、その音を聞くことは叶いません。



撮影年…昭和五年

現在



第38回文化財防火訓練

昭和二十四年(一九四九)一月二十六日、世界最古の木造建築である法隆寺の金堂で出火、貴重な壁画が焼損し国民に衝撃を与えた。これを契機に、文化財保護の思想は高まりをみせる。又、一年の内でも一月・二月は最も火災が発生し

やすい時期であるという事で昭和三十年に一月二十六日を「文化財防火デー」と定めた。以来、毎年この時期に各地で文化財所有者、各関係機関が協力し防火訓練等、文化財防火運動を行っている。

当大社でも毎年、この日に文化財防火訓練を行っており今年で三十八回目を迎えた。当日は小雪が舞う中、例年通り大社自衛消防団、宗像地区消防本部、宗像市消防団、宗像警察署合同で行われ、百名以上が訓練に参加した。



火点への放水



火事を告げる第一声

訓練は午前九時五十分、本殿裏の森から出火、国指定重要文化財の本殿・拝殿に火勢が迫っているとの想定で開始された。

火災を発見した巫女が直ちに火災報知器を押すと共に社務所へ連絡、社務所より一一九番通報。大社自衛消防団は可搬式ポンプにて心字池よりホースを延ばし初期消火にあたり、通報を受けた宗像市消防団第十一分団が境内に進入、放水を行った。又、巫女・宗像市女性消防団によるバケツリレーも行われた。



祈願殿に向け一斉放水

引き続き、強風により祈願殿に延焼拡大したとの想定で午前十時、宗像地区消防本部、宗像市消防団の各消防車両がサイレンを鳴らしながら第一駐車場に集結。各隊、統制のとれた動きで配置につき、一斉に祈願殿に向け放水を開始、本番さながらの消火活動が繰り広げられた。



宮司挨拶

消火活動終了後、宗像消防署長が講評、宗像市・谷井市長、宗像市消防団・荒木団長が挨拶、高向宮司が防火訓練協力の御礼挨拶を行い本年の防火訓練を無事終了した。

又、午後二時からは清明殿にて宗像地区消防本部指導のもと全職員を対象とした消火器並びにAED(自動体外式除細動器)心肺蘇生の講習会が行われた。当大社も四年前からAEDを設置しており、全職員真剣な眼差しで説明に聞きついていた。

今後定期的講習会を開催したいと考えている。



AED講習会

(続)

浜の寄物

263

いしいただし



玄界沿岸に漂着するものにモダマ(藻玉)がある。

マメ科のジャンボ。蔓性木本

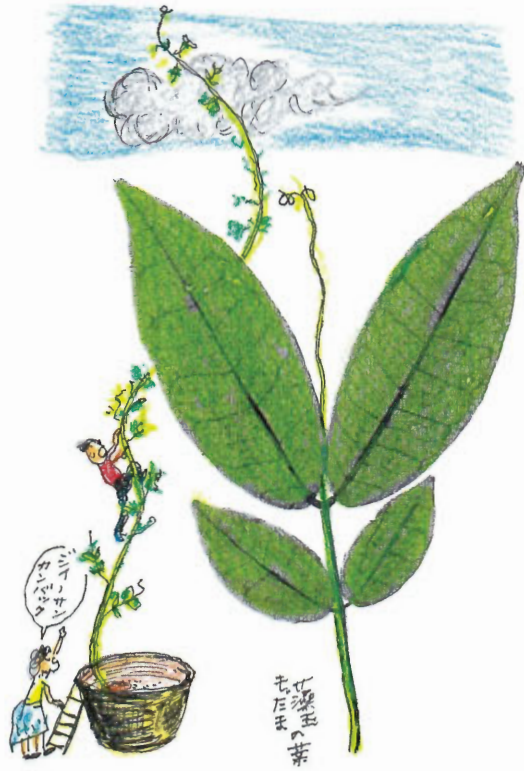
で、日本では屋久島に自生があり、沖縄、台湾などや東南アジアにも分布している。特にこのマメの莢は長く1m以上にもなるものもある。種子は扁球形で直径約6cm、厚さ1cm以上になる。色は暗褐色で甚だ堅く、加工して印籠や楊枝入れなどに作ることもある。種

子には毒分があり、砕いて水にさらして毒分を除いて食用にもなる。榼藤子とも呼ぶ。

明治三十年夏(一八九七)柳

田国男は大学二年の休みに、三河の伊良湖岬に一ヶ月余遊んだ時に、椰子と共に、このモダマを拾っている。

『海上の道』には「伊良湖で、椰子と共に私が拾った中にも、藤の実の形をして莢が二尺もあり、堅く扁たり濃茶色の豆



モダマの葉



を拾ったものを、土地でもモダマと呼んでいたから、同じもので産地季節が同じだったために、偶然に長い海上の旅を共にすることがあったのであろう」と記している。

私が海岸歩きで、最初の頃にモダマを拾ったのは昭和四七年(一九七二)十一月であった。宮司浜で一個、白石浜と勝浦浜で一個ずつ拾った。

漂着物学会でも、ビーチコーミングの時にモダマは人気者であり特に女性には人気が高い。豆の中央に穴穿して、ペンダントとしてアクセサリにもな

る。近年「幸福の種子」と名をつけて、エスニック関係の店で人気が高い。学会でビーチコーミングをする「モダマ拾った？」さて漂着物モダマではないが、近くの東南アジアの物産を売る業者と友達となって、種子や不良雑貨をもらうことが多い。モダマも約三十個ほどももらった。仕入れ先のタイ国産のものである。業者の話では内陸のチェンマイや、もっと奥の方に出かけるとの事である。

四月ごろ、その中より五個を選んで、水につけてみた。そのうち三個は浮びあがったので三個は引き揚げて乾燥させた。沈んだ二個はそれから一週間ほどそのままにつけていた。やがて表面がパリパリと剥げ、白い実が見え

てきた。それを植木鉢に移して、剥げているところを上にして、その周りに土をかぶせて、アンブルになった肥料を土にさしておいた。日あたりのよいブロックの塀のところに置いた。置いたことを忘れていたら二個のうち一個から、二十cmほどの暗褐色の茎がスーッと直すぐに出てくる。「おっ、出てくる」少し感動をした。それを大きい鉢に移してしばらく観察した。小さなひげつるが出てきて絡まろうとする。葉も出はじめ、日あたりのよい部屋に入れて、細い紐を吊り、蔓が巻きつくようにした。蔓はどこでも絡んでいく。最初から枯れていくが本蔓は少しずつ大きくなって、蔓に勢いがあり、私「これだと天までのぼるバイ」、家内「大きくなくても絶対にこの蔓に登らんごね」。

これから冬をむかえ「モダマはなはだ寒を恐る」と本にあり、部屋の中とはいえ、冬を越しきるか、水はどうするか、心配すること多い。



モダマ

第六〇六回

宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日メット



宗像市 土穴

山本 静子

「天孫降臨」聖地とぞある霧島の銚餅は初友のみやげの

作者の一番詠みたかったのは何かが分かると良い。意図と違うかもしれないが「霧島の銚餅」「天孫降臨」の聖地の土産をつつしみて食ふ」としてみた。

北九州市 八幡西区

豊田 光子

身の裡に秘かな妬心庭隅にポインセチヤの紅赤すぎる

よくできた歌。ポインセチヤの鮮やかな紅色が嫉妬する自分の心のようで、思わず赤すぎるとつぶやく作者。三句は「庭隅の」が順当だろう。

福津市 若木台

山崎 公俊

小さき像五体を祀りこの札所「おおあざ深田番外」とあり

番外というので、集落のはずれの人けの無い場所だろうか、地名が効いている。できれば五体の像の種類(地藏、神像など)を入れたい。静かな一首。

うきは市 浮羽町

向 則正

夜半すぎて亡き母の夢にあらはるる言葉届かず目覚めてしまふ

作者の母を思う気持がよく出ている。二・三句の言葉の順序をかえ上の句を「夜半すぎの夢にあらはれし亡き母に」とすると意が通りやすくなる。

福津市 中央

池浦千鶴子

朝毎の天気予報を見るたびに遠く住む子の所も見てやる

朝の天気予報を見る度に離れ住む子を思いやる作者に共感する。下の句「子の住む遠き街も見てをり」としてみたができれば実際の地名を入れたい。

福津市 若木台

野間 精一

枯れつくす梅林の中の幾本か山芋のぼりて黄葉あざやか

冬の梅の木々に巻きついた山芋の蔓の葉が鮮やかで印象的な光景になっている。初句は「冬枯れの」、二・四句を「幾本にからむ山芋の」としたい。

宗像市 日の里

大和美由紀

初冬の庭に植ゑたるシクラメンの花よりも輝きてをり

庭に咲くシクラメンの色鮮やかな花にっこりする作者。結句の輝くがそのままでは花の形容に合わないの(で「色輝けり」に。または「輝きて見ゆ」に。

宗像市 池田

森 龍子

正月の弾みつけむと活の良き海の息吐く鯯と向き会ふ

とても元気のよい歌。作者は鯯を正月用に買ったのだろう。すこし普通になるが「海の気を吐く」とき鯯買ふなどとすると分かりやすくなる。

福津市 星ヶ丘

佐々木和彦

京都より新山口へさしかかり帰心湧くなり新幹線のだぞみ

作者は山口の出身なのだろうか、帰心が湧く理由が解けると良い。福津市の我が家が近くなったと思うのなら帰心以外の表現が必要だろう。

宗像市 田久

巻 桔梗

カードならおほいに迷ふ八と九を値札に見ればころろが動く

最近の広告の値段には八や九が本当に多い、一桁違うとつい心を動かしてしまふ作者か。初句のカードは、ゲームならトランプとするかゲームの名を。

宗像市 東旭ヶ丘

天野 玲子

エプロンのポケットにあるヘヤーピン輪ゴムも硬貨と同居している

生活の中で歌の素材を見つけた事が上手な作者らしい面白い一首。主婦のエプロンにはこのような細々した拾い物が常に入っているものなのだ。

宗像市 青葉台

山下 奈美

冬の朝命途絶えし愛犬の言葉に尽くせぬ思いで残し

家族の大切な一員だった愛犬の死に言葉もない作者、気持のよく解かる歌。二・三句を変え「わが愛犬の命絶ゆ」と三句切れにすると印象が鮮明になる。

選者詠

小雪降るあした纏ひぬダウンコート、マフラー、ブーツ荷造りのごとわが眼には収めきれざる花の紅八重にしだれに咲く苑の梅

第五八〇回

俳句作品集

宗像市 武丸

白土 凌一

朝早く起んや外は霜住

冬が来て寒くすさぶや小雪かな

小雪舞う小供元気に走りなん

宗像市 日の里

花田いつ枝

短日や一つ買ひ足す間に暮れて

編集後記

慌ただしい正月三箇日を終えても忙しさに陰りが見えず、職員の疲れもピークに達しようとする頃、私は沖ノ島へ十日間「奉仕」に行つて参りました。他の神職の羨望の眼差しを感じてる中：▼沖ノ島の朝は、禊で始まりますが厳寒な海に首迄浸かるには覚悟が必要で、浸かる瞬間が一番身に堪えます。禊を終えると山腹にある沖津宮に上がり「日供祭」を奉仕します▼その後、私は時折瞑想します。目を閉じ耳を澄ましてみると鳥の囀りや木々の音、風の音などが聴こえなくなり、次第に心が落ち着き日々の生活でついた心の汚れが洗われたような心持ちとなります▼沖ノ島での生活自体が「禊」と云つて良いのかもしれない▼余談ですが、今回の勤務で四キロほど減量に成功しましたが、その変化に誰も気付いてくれませんでした。(松)

発行所 宗像大社社務所・宗像会

住所 〒八一一一三五〇五 福岡県宗像市田島三三三

電話 (〇九四〇)六二二一三二一(代)

発行人 葦津幹之

編集人 大塚宗延・松林拓

制作・印刷 セネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共 1,000円